

イエスのたとえと青年ヘーゲルの歴史論

川崎医療短期大学 一般教養

佐々木寛治

(平成5年10月20日受理)

Gleichnisse Jesu
und eine Geschichtsfassung Jungen Hegels

Kanji SASAKI

*Department of General Education,
Kawasaki College of Allied Health Professions,
Kurashiki, 701-01, Japan
(Received on October 20, 1993)*

概 要

シューラーNr. 81の内容の絶頂は「D 歴史」の最後の「たとえ話」論である。当時のヘーゲルにとって「歴史」とは「イエスと諸個人の間形式、イエスの教えの伝播」であった。イエスの教えとは、神がイエスのうちにおられたということ、イエスが人間たちのうちにその中心として住んでおられるということ、そのようなイエスと諸個人との神の国が現在している *daseyn* ということである。こうした精神的現実として現在する「諸個人形式」が歴史である。たとえとしてのイエスの語りは、絶対的彼岸に止住するユダヤの神性の形象を突破して此岸で「生成・進展」する「永遠なるもの」としての出来事である。この自らを「語り出す」「存在の生成」が「歴史的なるもの」である。孤立した永遠と孤立した現実、この両者をたとえは *Sache* と *Bild* として *tertium comparationis* において結合する（そのことによって両者は解体されて成就される）。「同等性を考えさせる」結合力としてイエスを通じて自らを示現するもの、それはコブラとしての *Gleichwie* でありやがて *Sein* である。

Resümee

Die Spitze im Schüler Nr. 81 ist die Lehre über Parabeln in „D. Geschichte“. Darin schreibt Hegel „D. Geschichte—Die Form wie er [i.e. Jesus] als einzelner, gegen einzelne, und einzelne gegen ihn stehen. Ausbreitung seiner Lehre“, „Parabeln Matth 13. Über die Art der Ausbreitung seiner Lehre, das Schicksal derselben“, „Es ist in ihnen das Geschichtliche, das Werden, der Fortgang des Seyenden, des Ewigen, des Lebendigen:—das Werden des Seyns ist das Geheimnis der Natur“. Was ist denn seine Lehre?—Daß Gott in Jesus war, daß er in Menschen als ihrer Mittelpunkt wohnt, daß das Reich Gottes als seine Beziehung mit ihnen da ist. Die Geschichte ist also für Hegel damals die Form von Einzelnern, die als jene geistige Wirklichkeit da ist. Wenn er in Gleichnissen redet, die Rede Jesu ist das Geschichte, das die jüdische Bilder von dem Göttlichen im absoluten Jenseits durchbricht, und das das im—Diesseits—werdende—Ewige ist. Dies sich aussprechende Werden des Seins ist das Geschichtliche. In Gleichnissen faßt *tertium comparationis* das isolierte Ewige und das isolierte Wirkliche in eins (und dann werden diese als solche vernichtet oder erfüllt). Was als die Verbindungskraft, die das Denken der Gleichheit fordert, sich durch Jesum darstellt, das ist die Kopula, das *Gleichwie*, das *Sein*.

序

『キリスト教の精神とその運命』の準備草稿のひとつであるシューラー Nr. 81 (以下『素案』と呼ぶ)は「B. 道徳」「Zu C. 宗教によせて」「D. 歴史」で構成されており、この「D. 歴史」の叙述はたとえ話、たとえについての論で締めくくられている。当時のヘーゲルの神性内在論をわれわれは別稿で検討したが、これをうけて本稿では、イエスの特徴的な言語行為としての「たとえ話」をヘーゲルがどのように論じているかを考察することを通じて、この時期のヘーゲルの歴史理論の一端を解明していきたいと思う。なおたとえ話、たとえについてはこの箇所以外には「愛餐論」(W 1 364-369)に若干の言及がある。誠に残念ながらわれわれにはこの箇所での『初稿』『改稿』の相違はつかめないが、このテーマについては『素案』がこの両者の間に位置するものと予想しつつわれわれはこの「愛餐論」を参照する。さてたとえ話論本文はつぎのように書き始められている。

たとえ話 *Parabeln* マタイ伝13章。[これを考察することは]イエスの教えの伝播の仕方やその運命について[考察することである]。すべてのたとえ話(良い種、麦と毒麦、からし種、パン種、見つけられた宝などなどについてのそれ)は神話と全くよく似ている——ただしもちろんその神話とは、日常的現実にしがみついている an Wirklichkeiten [angeknüpft] ユダヤ人の神話のことだが。これらのたとえ話の中には[寓話の最後に普遍的結語つまり Epimythion として語られることの多い]「寓話は教える」[で始まる部分]があるのでないし、そこから教訓が出てくる訳でもない。あるのは歴史的なるもの、[つまり]存在するもの・永遠なるもの・生けるものの、生成・進展 das Geschichtliche, das Werden, der Fortgang des Seyenden, des Ewigen, des Lebendigen に他ならない。——存在の生成は自然の秘密[奥義]である das Werden des Seyns ist ein Geheimnis der Natur。[……] [マタイ伝のこの章で]たとえ話が畳み掛けて多く語られているということ自体が、その意味せんとするところの表現し難さ das Unvermögen, das darzustellen, auf was sie deuten sollen を示している。ただし、貴重なもの、非常に願わしいものがじつは彼らの知っているものとは何か別のものであるということ、この一点 nur daß das Kostbare, ein großes Wünschenswertes, aber ein anderes als sie kennen は表現されている。同55「コノ人ハ大工ノ子デハナイカ」同57「預言者ハ自分ノ郷里ヤ自分ノ家以外デハ、ドコデデモ敬ワレナイコトハナイ」。彼らは日常的現実しか見ず、精神を見ない。彼らは自分たちがそうであるところのもの以外には何も見ない Sie sehen nichts als die Wirklichkeit, nicht den Geist, nichts als was sie selbst sind。

[71v.a] (K 51, W 1 316)

マタイ伝13が伝えるところによれば、「見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らない」(V 13) 群衆には「天国の奥義 die Geheimnisse des Himmels [ルター訳]を知ること」(V 11) が許されておらず、イエスはそうした彼らにこの奥義を告げ知らせるためにそのたとえ話を語ったのである。明らかにヘーゲルはこの奥義を「自然の奥義」と言い替え、その内実を「存在の生成」だとしているのである。そしてこの奥義を開示すべきたとえ話の中にあるものこそ彼は「存在するもの・永遠なるもの・生けるものの、生成・進展」という意味での「歴史的なるもの」であるとしている。

ところで福音書記者はこの章でのイエスのたとえは、次のような預言の成就だと語っている。

「あなたがたは聞くには聞くが、決して悟らない。見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍くなり、その耳は聞こえにくく、その眼は閉じている、云々」(V 14-15)

「わたしは口を開いてたとえを語り、世の初めから隠されていることを語り出そう」(V 35)

しかしヘーゲルその人も(福音書記者のそれにも比すべき緊張をもって)、預言者によって言われたこと *τὸ ῥηθὲν διὰ τοῦ προφήτου* の成就 *πλήρωμα* に特別な注意を払っているように見える。それは直接には、上記ヘーゲルの記述にも窺われるように、ヘーゲルの考察自身がうへの二つの預言との関連からイエスの行為を理解しようとする面を持つからである。他方でこの箇所をうちに含む『素案』のヘーゲルは神的な言葉が時間のうちに「根付く *anschlagen*」こと(ここではそれは伝承の中での預言者の語りとイエス個人の語りとに二重化している)に鋭い関心を寄せ、この観点からも彼はイエスをユダヤ教の伝統と神発出の中へ意識的に据えてその現実的個性性を解体しようとしているからである。

さて上掲引用文に例として挙げられているからし種、パン種のたとえはマルコ伝4,3以下のたとえとともに<成長のたとえ>とかく出現のたとえ>と呼称されることが多い。エレミアスはこれらを「絶大な信頼 *Die große Zuversicht*」のたとえとして分類している。彼の説明の要点を記しておこう。

東洋人は最初と最後に注目し、彼らの驚嘆は全く異なった二つの状態の継起にある。一方は死んだ粒、他方では神の全能の奇蹟による生命。からし種、パン種は個々にみればあるかないか分からない微量なものだが、からしの木は二メートル半から三メートル、鳥に隠れ家を与える木となる。鳥を保護する木とは自分の臣下を保護する強大な国を指すよく知られた比喩である。みすぼらしい始元から、人間の目にとっての無から、ご自身の王国を神は創造される。
J 127 ff.

イエスのたとえについての現在の多くの解釈は、たとえを聞く者自身が(このたとえの場合では、「最小の始元と最大の帰結の中間」に立たされることにより)おのれの現実の解体の危機に直面させられ新しい可能性への選択の決断を言語遂行的に迫られているという方向での、主体の側の再生という契機を不可欠のものとして読み込んでいる。ヘーゲルがたとえのなかに「教訓」ではなく、「歴史的なるもの」を読みとるとき、一方でそれは全く新しい精神的現実であろうし、他方でそれはたとえを聞く主体に無関係にまさに客体的に物語られるだけの現実ではないであろう。ヘーゲルはその「読みとられる」ものがたとえという言語形式のどういう構造の中にはらまれているのかを「D. 歴史」のたとえ話再論部に書き記している。

マタイ伝25章でも同じことがいえる。これらのたとえ話は東洋的な寓喩でもなければギリシヤ的な神話でもない。東洋的な寓喩やギリシヤ的な神話はその両方とも、事態そのもの、存在、美なるものを語っている。[・・・]ここにみられるイエスのたとえ話 Parabeln は、それらの中に比較の第三項 tertium comparationis が存在する本来のたとえ Gleichnisse, 当代の寓話である。この比較の第三項において同等なものが考えられているのであって、(古代の、イソップの寓話ではそれは衝動、本能、同様に様態化された生命であった) [イエスの]たとえ話ではそれは現実の歴史そのものであり、だから常にそれは「如くに」immer ein Gleichwie である。 [71v.a] (K 51f., W1 316)

「イエスのたとえは寓喩ではない」との挑戦的言辞で現代のたとえ解釈の歴史が切り開かれたのは A. Jülicher *Die Gleichnisreden Jesu*, 1888 によってであった。これにならい、イエスのたとえが伝承によって、さらに正典化された福音書そのものによって強固にそして多様に寓喩的解釈、寓喩化 Allegorese, Allegorisierung をほどこされていることを詳細に指摘し、「原始教会よりイエスに帰れ!」と呼びかけたのは J. Jeremias *Die Gleichnisse Jesu*, 1947 であった。その後現在に至るまでのイエスのたとえ解釈の歴史は一面では福音書そのものから寓喩の仮面をはぎ取っていく過程であったといえよう。ユーリッヒャーの与えた衝撃によってこの流れが開始されるおよそ一世紀前に、ヘーゲルは「イエスのたとえは寓喩ではない」と語っているのである。ヘーゲルのこの発言は彼自身が挙げたマタイ伝13の「麦と毒麦のたとえ」のなかにマタイ自身が個々の寓喩の辞典的解説を記しているだけに一層鮮明な注意を惹く。

さてヘーゲルはこの引用文の中で「イエスのたとえ話は、それらの中に比較の第三項が存在する本来のたとえ」であると述べている。たとえをもって表現されるべき当の事態 Sache (例: 神の国) と、自らは日常生活の中のものとしてこの事態を指し示している表現 (例: からし種) としての形象 Bild が、たとえにおいては並置されている。この事態項 die Sachhälfte と形象項 die Bildhälfte との同等性が思惟される場が比較の第三項である。一般には「たとえ話 においては並置された相異なる両項がひとつのうちで掴まれるように」という daß die verschiedenen Zusammengestellten in eins gefaßt werden 要求は存在しない (W1 368)。しかし「たとえ話」も、「相異なるもの比較されるもの [相互] が区別され分離しているものとして立てられ、比較のみが、つまり相異なるものの同等性の思惟のみが nur Vergleichung, das Denken der Gleichheit Verschiedener [比較の第三項において] 要求される」場合は特に限定的に「たとえ Gleichnis」(W1 366) であるとされている。ヘーゲルは『初稿』ないし『改稿』の愛餐論ではヨハネ伝10,7「わたしは(羊の)門である」という比較 Vergleichung [この語の訳語はここでは「暗喩」である] (W1 366) を考察しているが、上掲引用文の末尾で Gleichwie が強調されている『素案』たとえ論の場面では、彼は「神の国はからし種の如し」という直喩として、つまり

「天国 (= 事態項) は・・・の (= 形象項) 如し (= 比較の第三項)」

S[ache] ist gleichwie B[ild].

という表現形式において、しかも特にそのコプラとしての比較の第三項の結合力に注目していたのだと考えることができよう（おそらくこれは「定立的命題」をめぐる思索の出立点をなすものであろう）。

うえのたとえではこの比較の第三項は想像を絶する成長力、あるいは（主体面に注目して）それを具える神への絶大な信頼に関連する何かであった*。これが生み出された出来事、上記引用文の「（新たな精神的な）現実の歴史」である。だが困窮の中に困窮のみを見出し、困窮で自分を慰めるだけの者が何かに晴れやかな信頼を寄せうるだろうか。言語行為としてたとえが成功するか否かはもちろん、宗教内容を語る事態項と日常生活を語る形象項とに対して比較の第三項がどれほどの結合力を発揮するかによる。その結合力は、たとえを語るものの語りがそれを聞く者の心の内に真上から垂直にどれだけ深く突き刺さるか、両者がどれだけ深い次元で出会うかによる。深い次元での出会いが可能かどうかは、聞く者が自分の現実のどれほど深い次元での転倒と崩壊を味わうかによる。

朝一番に雇われて一日中労苦と暑さに耐えたぶどう園の労働者が、夕方の一時間しか働かなかった者と同じ額しか支払われないのを知って怒りをもって自己主張したその内容、それをも恥じ入らせざるをえない何かをこの支払いの中に見るのでなければうえの出会いはいり得ない。自分がユダヤ人としてサマリア人をどんなに軽蔑し憎んでも、溝に横たわっている男に彼がなした行為を自分への有無を言わせぬ促しとして受けとめる者だけがこの出会いの中で生まれ変わるのである。

主語 Sache と客語 Bild を結ぶコプラ, Gleichwie, やがてはその外皮を破って出てくる Sein の力は、神的言葉が古い現実真上に打ちつけ解体しそこへ新しい生命を生みつける創造力である（このような解体と産出をなす第三項の力をヘーゲルはすでに『腹案』「運命論」の中に語り出している。——「これに反し運命は和解されうる。何故ならそれは分枝のひとつでありひとつの分離されたものであるが、分離されたものとして反対項によって否定される底のものではなく合一によって破棄されるものであるからである」「生命は生命として生命と相違しはしない」 K 39 W1 305）。この意味での生成、〈イエスの語り〉という始元が駆り立てる精神的な生起 Geschehen, これをヘーゲルは「歴史的なるもの das Geschichtliche」と呼んでいるわけである。つまり彼は「イエスの教えの伝播」をそういう歴史と解しているわけである。しかしこれを日常的現実とは隔絶したものと考えてはならない（Vgl. W1 312）。「歴史的なるもの」は日常の事柄としての現実性にまとわれ、「その意味せんとするところの表現し難さ」の外皮のもとで現在する。しかしこの現実埋没している意識に対しては、その不可解さそのものがそれを注視し続けることを強制し、やがてそれが「非常に願わしいもの」であるらしいことだけはこの意識に伝わってくる。ここから聞く者の再生が始まるか否かは当人の決断によることである。たとえ話の「その意味せんとするところ」を示現する darstellen のは直接にはイエスの語りであるが——たとえ話自身が発見させる力と創造力（たとえ話の中であってこれを事態そのものへと方向付けるもの、物語 Geschichte を絵空事ではなくまさに存在の生成の開示としての真実を担うもの

とする所以のもの)を持っていることを介して——本源的には永遠なるものそのものであるというべきであろう。ここに言葉が生み出す精神的な現実性、むしろ言葉の現実的成長力ともいうべきものへの視角が開けてくる。

ここでヘーゲルはたとえ話が(あるいはたとえ話を通じてイエスが)「歴史的なるもの」を語るとは書いていない。たとえ話のなかに「歴史的なるもの」があると書いている。イエスの語りは、出来事 *Geschichte* を語るのではなく、それ自身が(そこにおいて垂直軸と水平軸とが衝突する)出来事であるからであろう。ヘーゲルはこの草稿の中で言葉の創造成長の力を考察しているのである。それは「所行として神的である所行は超自然的なものでなければならなかった——神的なものは生ずるようなものではなく、存在するものだからである」(K 46, W1 311)とされるユダヤの神性と現実性に対置されるとき、贖罪の死の思想を拒否するヘーゲルにとっての救済論の柱ともなるべきことがらである。このような生成論は神的なものの自己示現の論の一翼を占めるものであり、この自己示現論は『改稿』では「神的活動は合一の再建と示現である *Göttliches Tun ist Wiederherstellung und Darstellung der Einigkeit*」(W1 414)と表現されるに至る。しかし生命、愛、精神としての類縁のものとの合一が追求されるのであり、異質のものとの総合がヘーゲルによって語られるようになるには『信と知』の出現(GW 4 327f.)を待たなければならない。

※ たとえの隠喩性を強調する解釈者たちの間では、比較の第三項を「修辞学の教室から持ち出した」(Norman Perrin)などとしてユーリッヒャーを批判する者が多い。しかしこの第三項を「翻訳可能な」「外在的知識」と固定化せず、破壊しつつ新たなものを生み出し生成する結合者と考えてその意義を引き出すことを、ヘーゲルと共に(H. Wederに教えられつつ)試みるのが小論の意図である。

引用略記

- GW : G. W. F. Hegel *Gesammelte Werke* hrsg. von der Reinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften
 W : G. W. F. Hegel *Werke in zwanzig Bänden* Suhrkamp
 N : Hegels *theologische Jugendschriften* hrsg. von H. Nohl Tübingen 1907
 U : G. W. F. Hegel, *Der Geist des Christentums, Schriften 1796-1800* hrsg. von W. Hamacher Ullstein
 K : 久保陽一 『初期ヘーゲル哲学研究』東京大学出版会 1993年
 J : J. Jeremias *Die Gleichnisse Jesu* 5. unveränderte Auflage Göttingen 1958

用語検索

千葉大学文学部加藤尚武研究室開発ヘーゲル・データベース SK01.HEG, SK03.HEG
 ならびに 検索システム TEXAS ver. 2.58 の恩恵を受けている。